

ハルシナイから上流へ ⑮

前回までは、安政四年(一八五七年)の松浦武四郎から、明治十八年の岩村通俊まで、カムイコタンを通過、または往復した人物の踏査紀行を通して、カムイコタンに対する個々の感慨や、丸木府時代のカムイコタンとはどんな所かを紹介してきた。

これまでの記録は、丸木府が通る春から初冬までのもので、丸木府が通らない冬の唯一の記録が、安政五年(一八五八年)の松浦武四郎の「登加知留字知之誌」である。そのダイジェスト版が木版刊行された『十勝日誌』である。この記録は、松浦武四郎の蝦夷地行の六回目で最後の踏査であった。武四郎は、蝦夷地新開新道の適地調査の命を受け、一月二十四日(陽曆三月九日)に箱館を出発、長万部、虻田を通り、中山峠を越えて、札幌を経て石狩に到着した。

松浦武四郎一行は、二月二十四日(陽曆四月七日)に、丸木府二艘で石狩を出発、六泊目のトツク(現・新十津川町域)から石狩川は結氷のため丸木府は使用出来ずに、ここから陸行し、カムイコタンを通り、旭川の忠和の番屋に滞在、各コタンを歴訪後、三月九日(陽曆四月二十二日)に十勝に向け出発、美瑛川から

富良野川上流へ出て、前富良野岳の鞍部を越えて空知川上流に出、十勝に山越えして、十勝川を下って、三月二十日(陽曆五月三日)に大津に到着する。この踏査の幕府への公的報文日誌が、「登加知留字知之誌」である。

トツクからなお二泊し、内大部川を越えて、北海道指定文化財の神居古潭、堅穴住居遺跡前を流れるラウネナイ(Tawne-nay 細く深く掘れた・沢)の山側の熊の古穴という大きな岩穴の雪を取り除いて、松浦武四郎ら三人が入り、他の八人はその側にキナ(Kinaガマの茎で織ったゴザ)で屋根を作り止宿した。但し、右のラウネナイは、松浦武四郎がこの踏査に持参した野帳(フィールドノート)の『午第一番』と、『十勝

野帳(フィールドノート)の『午第一番』と、『十勝



旭岳のアイヌ語名…安政5年『午第一番』

柴木・多い・沢↓現・神居第二線川)からは、遠回りになる石狩川沿いに歩かないで、この沢から山に入り、山越えして上流に向かったのであった。これがアイヌの人たちの交通路であった。

実は、明治十九年六月二十四日に竣工の上川仮新道(国道十二号の前身)は、**掲載地図**の石狩川沿いの旧国道十二号を通らずに、松浦武四郎一行が通ったアイヌの人たちの通路だった山道を通ったのである。明治二十年十月の初代北海道庁長官の岩村通俊一行、明治二十一年九月の第二代北海道庁長官の永山武四郎一行も、この山道を通ったのであった。この通路については、ペンケアソナイの項で詳述したい。



さて、**掲載地図**は、この踏査の野帳に描かれた石狩岳(現・旭岳)のアイヌ語名のノタツカウシベノホリ(又タプカウシペヌプリ nutap-ka-us-pe-nu-pu-ri 山の上の湿原の上)にある・もの山↓山田秀三説)である。旭岳のアイヌ語名が初めて記載されたもの。文化四年(一八〇七年)、近藤重蔵は、『蝦夷地図』にオツタテシケ山と書き、前回紹介した富士成豊の『上川原野見取図』では、大雪・十勝連峰を「ヲブタテシケ山脈」(オプタテシケヌプリ) (op-ta-teske-nupuri 槍が・そい)・はねかえった・山↓山田秀三説)と書いていて、時代・伝承者によりアイヌ語の山名も異なるという典型的な例である。